

更に越えて五年の後一八五五年、彼が五十歳の誕生日を迎へて、かの雄麗な自敘傳「吾が一生の物語」を書き上げてゐる。彼の生涯そのものが、すでに大きな美しいエヴェンチュアであつたのだと彼自身が、先づその筆の最初にかいてゐる様に、素晴らしい生涯を描いてゐる。多くの批評家が諸家の自傳中の白眉であるといつてゐるやうに、彼自らも一生をかへりみて、驚きの餘り、たゞ、その全生涯の幸福を神の榮光に歸してゐる。

「亞麻」はその大作の概念圖であり、「自傳」は「亞麻」の詳細圖である云ふこゝが出来る。

アンダアセン歿後六十年こゝに「亞麻」の邦譯を試みて我國文によつて讀む讀者の爲めに、彼の文豪の自傳前奏三部曲の一つを補ふこゝの出來たのは一つに、日本幼稚園協會の優遇によるこゝに厚く感謝の意を表します。

因みにこの譯は左の二つの原文に準據したものである。

コペンハゲンのギルデンダルス社版の一八九九年出版ウエルヘルム、アンダアセン博士の校定によるホ、シ、アナセン著作全集十二冊本及び同社一九二四年出版ハンス、ブリック及びアンカア、イエセン共編新校訂及解説附ホ、シ、アナセンのエヴェンチュア五冊本。

後者は先年アンダアセン五十年記念祭の當時丁抹國政府より寄贈された定本で日比谷圖書館の藏本になつてゐる。此の翻譯の爲めに特に借出されたものである。

アンダアセン原本の插畫家へダアセンの畫風を紹介す

アンダアセン得心の插畫を描いた Wilhelm Pedersen の鉛筆のやわらかいエッチングをこゝに紹介する。

一八六三年版の二冊もの全集ではじめて、このアンダアセンの文ミ照應して全面的に美しい味を見せたものはこのペダアセンの作品であつた。アンダアセンの物さきにも北歐の大まかですなほ心持に觸れさせてくれるものがある。こゝには「あひるの子」の中で、やもめ婆さんの家に、幼いはく鳥の雛が、小さくなつて世話になつてゐる、全ページものを紹介する。これはアンダアセンが世に出る機會をつくつて呉れたコリン一家を記念する記録でもあるので、ペダアセン氏も相當に骨を折つたもので、挿畫中の力作の一つである。北歐民家の生活振をもよく描出してゐる點から代表的にこれを選んで見た。

その他に小さいものでは、「亞麻」の挿畫を併せて紹介して置く。

このペダアセンについては、一八六三年の全集に附されてゐる、解説の冒頭でアンダアセン自身喜びの餘り次のやうに述べてゐる。

「この版を既刊の各版ミ比較して、異つてゐる最も著しい特徴は、豫告通り、全部の Eventyr ン Historie に涉つて、陸軍士官の V. Petersen 氏を煩はして此の全集で漸く挿畫の完成を見たことである。一八五八年の新しい集でこの希望を豫告してからすでに六集を出して來た、今日こゝに此の適切な、すぐれた挿畫を得た次第である云々」。

このアンダアセンの文ミ名コンビをなすペダアセンは其の後アンダアセンに先つて歿したので、佛國で出た二つの兒童本に挿畫を描いたこゝのある Lorenz Frølich についで繼承されてゐる。

こゝに挿出して紹介したものは、コペンハーゲンの Gyldendale 社の苦心して複製した一九二四年版から採つたものである。アンダアセン物の挿畫中の最高逸品であり、我國では恐らく初めて見られる原本挿畫の味であると言ふことが出来るかと思ふ。